ルミリの
すくいさく
研究日誌

ふたりのさくさく研究日誌

C子
超復元性体質(モドリ)の
実験体。無邪気で快活。
ハルの開発した機械に
何をされても元に戻る。
ハルの新型がいつか
自分を変えてくれることを
ワクワクしながら待っている。
気持ちいいこと全般が好き。

蒼乃　ハル
研究者。ふたなり。
快楽装置の開発が
趣味であり特技。
倫理観は壊れている。
C子を完全陥落させる
べく日夜奮闘中。
自慰が好き。

地下深くのとある実験施設に水音と嬌声が木霊している――――

透き通るような声と、機械の駆動音だけが聞こえる。

私…「蒼乃 ハル」はその空間を何より愛していた。

限られた者だけが知る、秘密の研究施設。

ここでの暮らしは最高だ。設備環境は異様なほど充実している。

幾人もの"特殊な"少女を自慢の快楽装置で陥落させてきた。

その中でも、コイツだけは――――

……まぁ、必ず音を上げさせてやるけれど。

これは私と"彼女"の記録。音声データも残している。
いつか、何かの役に立てばいいのだが……

「射精量、増加は20%かぁ……」

「ンおおお♥おごっほぉっ♥イグイグイグゥゥゥ――――ッ♥♥」

「データ更新したんだけどな……視覚野の情報は……」

「射精止まらなっ♥ひゅごっ♥また…出ちゃうッ♥」

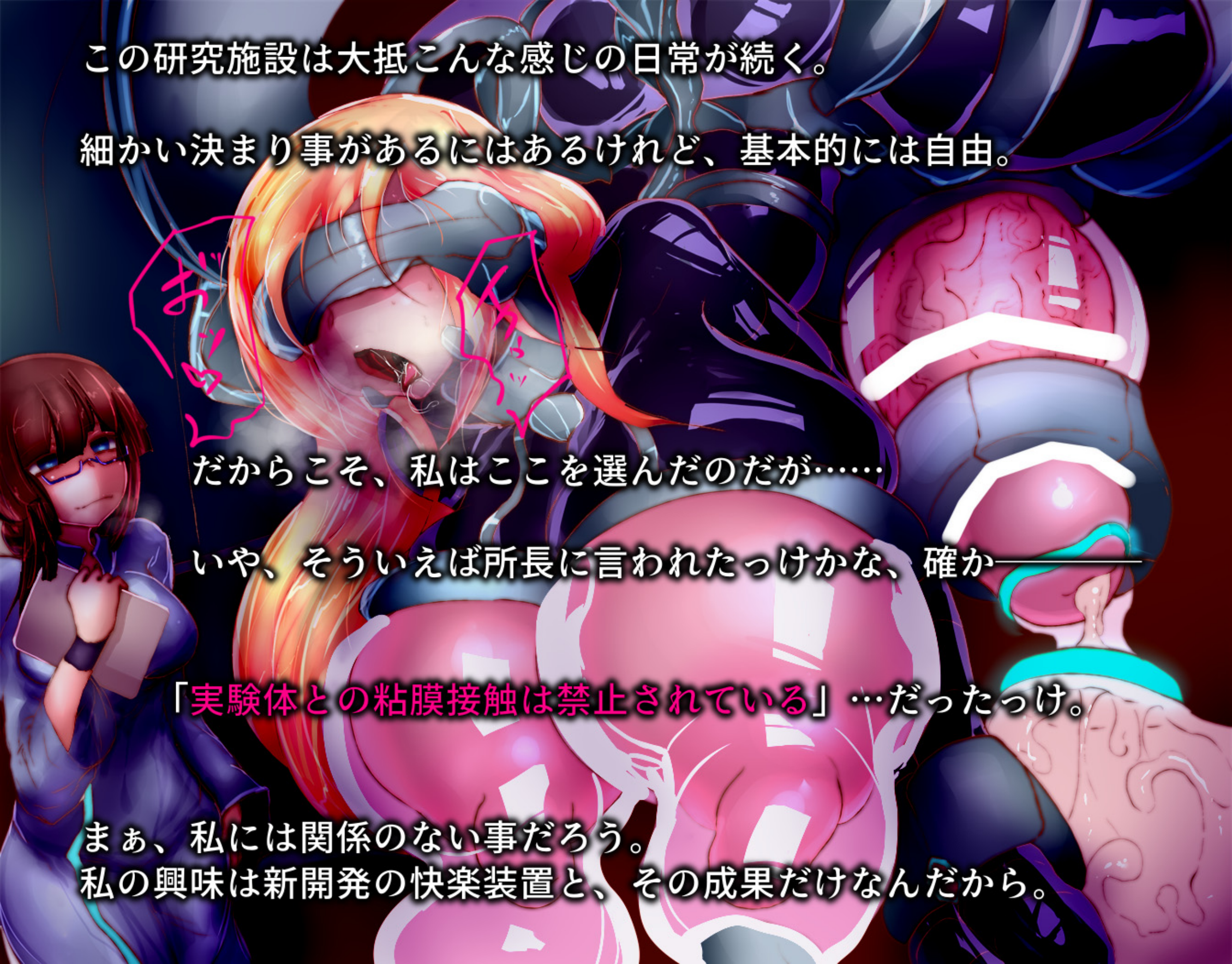
「あ、そうかこっちだ……これをこう……」

「んヴ！？あたまっ♥かき回されッ♥」

「お、増えた増えた。これか～……いや、こっちのパラメータが…」

この研究施設は大抵こんな感じの日常が続く。

細かい決まり事があるにはあるけれど、基本的には自由。



だからこそ、私はここを選んだのだが……

いや、そういえば所長に言われたっけかな、確か――――

「実験体との粘膜接触は禁止されている」…だったっけ。

まぁ、私には関係のない事だろう。
私の興味は新開発の快楽装置と、その成果だけなんだから。

「おヒっ♥出ちゃうッ♥ミルク吸わないでぇッ♥」

そうこうしている間に噴乳が始まった。今回はなかなかの成果だ。

"彼女"は必死に身じろぎする。無駄なことだ。

今回の装置はひと味違う完全拘束タイプ。

特殊なスキンはエアコンの風ですら愛撫へと姿を変えるのだ。

視覚野からは特殊な映像を流し込み、さらに感度を上げる。

膨れ上がったペニスからは絶えず濃濁精液が滴り落ちている。

装着されたピストンマシンも特製で――――

装置の特長は枚挙に暇がない。
それでも。
「――――――――――――――――――――――――――――――――ッ♥♥♥」
これだけやっても。
"彼女"は堕ちない。
それどころか――――
ぶしゅる
どぴゅ!

「出る♥出る出る♥出ちゃうッ♥精子ひり出すッ♥うほぉっおごっ♥」

「もっと…もっとぉ……♥」

「もっと射精したいよぉ……ッ♥」

"彼女"こと「C子」は…貪欲だ。恐ろしいほどに。
しかしながら、さらに驚くべき秘密が、この子には、ある。

「……もう一度最初からやり直し、か……」
ため息混じりに呟く。相変わらず、成果はほんの少しだけだ。

「こんなに甘い拘束でさ、あたしをどうにかするつもりなのぉ……？？」

「うるさいわね」

「ふふっ」

この通り―――C子は「いつの間にか元の姿に戻っている」……
一応、ちゃんと子どもから成長したんだ、と本人は言っているのだが。
生やしても、増やしても。あるいは切り落と―――いや、そういう趣味はない。
とにかく、"超復元性体質"であると言うのだが……
私もこの目で見るまでは信じられなかった。

私に与えられた課題はこの子を「変える」こと。
この奇妙な関係も、それなりに続いているのだが……成果は出ないままだ。

「今日は何をしてくれるのぉ…？？♥」
「たくさん気持ちよくシてくれるんだよね♥」
「まさか、今日こそ愛の籠もった交尾、なんて……」
「……どうしたのぉ？」
そんなにまっすぐ見つめるんじゃない。
これはただの仕事。そして趣味だ。
すぐにお別れなんだ。感情移入なんか……していられない。

「……今日は材料研からの依頼品のテストよ。」

「なーんだ、残念。」

「……特殊素材の……通気性樹脂……形状変化と硬化調整が……」

「ま～たお仕事モードだ。つまんないのー」

「もう始まってるわ。」

「…え？」

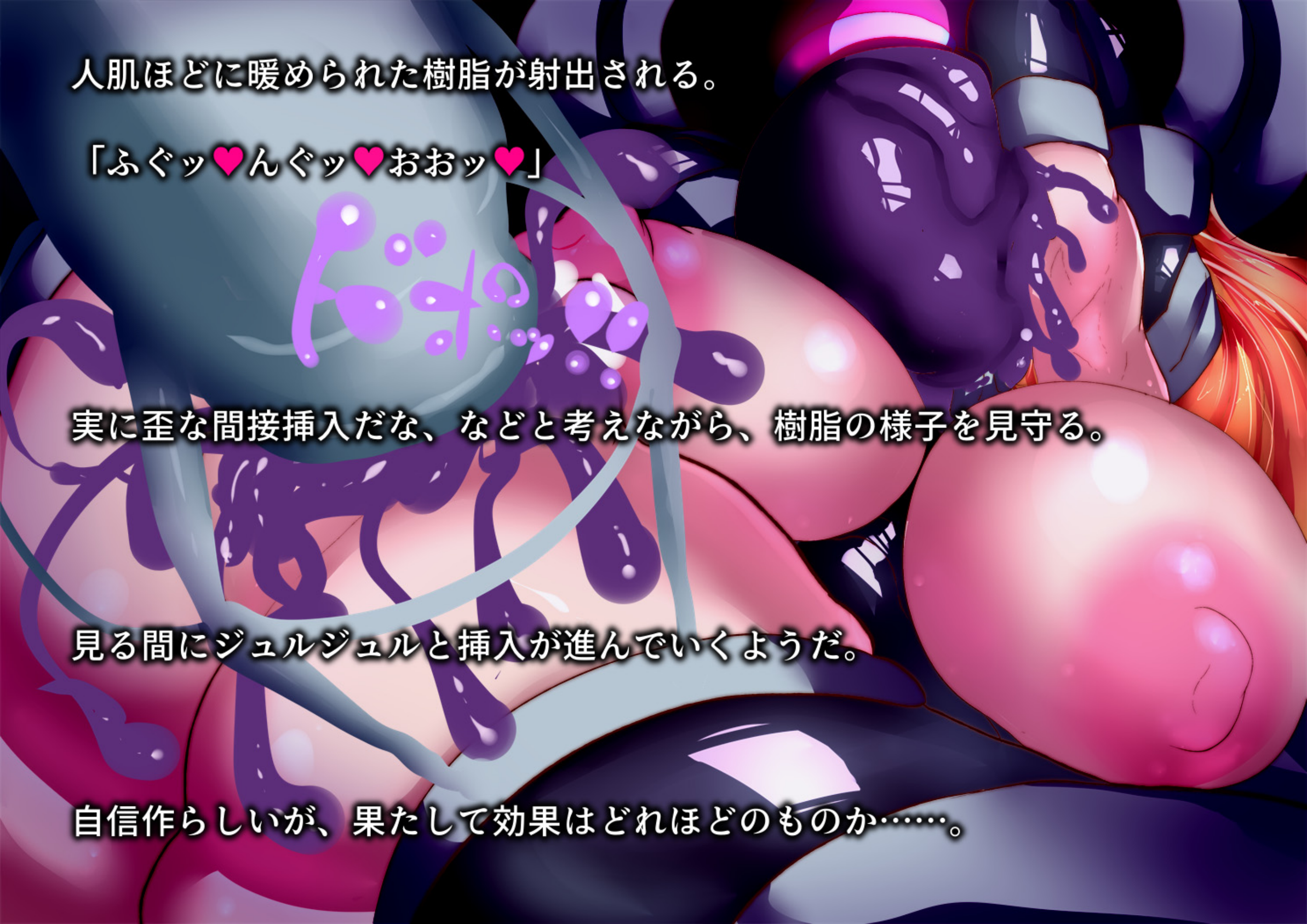
瞬間。液体がC子の顔に覆い被さる。
「がぼッ！うごぉ…っ!!」
「すぐに硬化するから。そうすれば呼吸できるわ。」
「ごぼッ」
「ごんッ…く、お……ッ！！？」
「……えーと、こっちが自律運動繊維配合の……」
いつもの自分に戻る。そうだ。これでいいんだ。

容器を接合して、設定に入る。

C子は既に落ち着いたのか、ゆっくり腰をくねらせている。

「ふぐぅ…ンンっ♥」

「張り型の設定が出来るんだ……ふむふむ……」
こっそりと、自分の陰茎データをインプットする。


人肌ほどに暖められた樹脂が射出される。
「ふぐッ♥んぐッ♥おおッ♥」
実に歪な間接挿入だな、などと考えながら、樹脂の様子を見守る。
見る間にジュルジュルと挿入が進んでいくようだ。
自信作らしいが、果たして効果はどれほどのものか……。

暫くすると、一定の形状に自動成形されているようだ。

見た感じはバイブレーターそのものだ。

「…自信作、ねぇ。」

拍子抜けした様子で観察を進める。

C子はこんなものでは満たされないだろう、という感想が
零れそうになったその瞬間――――

突然、高速ピストン運動が開始された。

C子の腰が跳ね、愛液が辺りに飛散し始める。

機械的な、乱雑な挿入が繰り返される。

ズブッ！ズボッ！！

「あおッ♥おおおッ♥んう♥♥ううぅ――――ッ♥♥♥」

「なるほど…筋繊維はこのための……考えたな……」

そこでふと、考えが止まる。

ピストン運動は艶かしく、整った動きへと変化する。

まるで性交時の如く、滑らかな動き。

愛液が激しく迸る。絶頂しているようだ。

今、挿入されているのは私の陰茎データから形成されたペニスのはず。

それほど大きさに自信があるわけではないが、ここまで、
その、感じてる…のか。C子が私の―――

「うぐ♥ん♥あおッ♥おおッ♥おぼッ♥イッ♥ぐ♥むッ♥うグッ♥♥」

「――――――――――――――――――ッ!!♥♥」
噴乳。まさか。
今までソコに到達したケースは3件しか……
似たような装置だって造ったことがある……それなのに。

「ぷ、はァ……気持ち、良かったぁ……♥」
「そ、そうね…材料研に良い報告書が送れそう…」
「とても良かったの…ハル『の』が。ふふっ。」
「何の、事かしら……」
ゾクリ。と背筋に悪寒が奔る。C子には何の説明もしてはいない。
———思えば、この日からだった。何かがおかしくなり始めたのは……